

年間第二主日  
ヨハネ 2・1-11

2013.1.20 高円寺教会  
鈴木康由（鹿児島教区助祭）

今日の福音は有名なカナでの婚礼です。この箇所はロザリオの祈りの光の神秘で、第二の黙想にあたることから非常に馴染みのある話です。しかし、話す側にとってはこうした良く知られた箇所ほど話しづらいものです。だから…というわけではありませんが、今日はちょっと違った角度から、今、読まれた福音箇所を中心に、福音記者ヨハネが表現したかったであろうことを福音書全体の中から読み解いていきたいと思えます。

さて、今日の婚礼の場面での出来事は、往々にして神の国に於ける婚宴の先取りである、という読まれ方がなされるようです。確かに、マタイ、マルコ、そしてルカに於いてはこのような関連付けは見られます。事実、イエス様は自らを婚礼に於ける花婿に喩えていたり（マタイ 9・15 並行）、天の国を王子のための婚宴に喩えていたりする箇所があります（マタイ 22・1-14 並行）。しかし、これらに対してヨハネに於いては、ただ単に最初のしるしが行われた場面としてしか描かれていません。また、このカナの婚礼の話は他の福音書にはありません。こうしたことから、ヨハネがこの婚礼の場面を通じて何を表現したかったのか、ということに改めて考え直してみる必要があるのです。まず、注意したいことは — 今日の朗読では省かれていましたが — この場面の冒頭はいきなり「三日目に」という言葉から始まる、ということです。実に、聖書に於ける「三」という数字には神の御業が実現する時、という意味があります。これはイエス様が三日目に復活した、ということからもわかります。また、旧約聖書でも神の御業が現れるのは「三日目」とだいたい相場が決まっています（ホセア 6・2 等）。こうしたことから考えると今日の話は、イエス様を通じて神の御業が目に見えるかたちで具体的に現れた、ということが根底にあるのではないかと想像できるのです。また更に数字に着目するのであれば、石の水瓶は六つ置かれていました。この「六」とは不完全であることを意味します。これは天地創造の完成までが七日間であったことや七回とか七度、七の七倍や七十倍という表現があるように（創世記 2・2；列王記下 5・14；レビ 25・8；マタイ 18・22 等）、神の御業が完全に成就することを意味する七の一つ足りないことになら、六は不完全を意味するのです。このように、これらの二つの数字が意味することから今日の場面を考えると、神の御業は具体的に見えるかたちで起こったが、しかし、それはまだ完全ではない、ということが表現されている、と読めるのです。だからこそ、「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って」と敢えて「最初の」という記述をしたと考えられるのです。次に、ここで「最初」という始まりを意味する言葉が使われているのですから、当然のことながら「最後」を意味する終わりがどこかにはあるはずで、また、実はこの「最初の」

と同じ意味で使われている言葉があります。それはイエス様が「わたしの時はまだ来ていません」と仰った中の「わたしの時」という言葉です(2・4)。では、イエス様の最後のしるしはどこでなされ、イエス様の時はいつ来たのでしょうか。ヨハネ福音書ではそれらがどこに描かれているのでしょうか。もちろん、ヨハネ福音書の中には「最後のしるし」という言葉も「イエスの時が来た」という言葉も見当たりません。しかし、それらに相当する言葉はイエス様が十字架つけられて亡くなる場面に出てきます。そして、この場面と今日読まれた箇所を関連付けて考えると非常に面白いことがわかります。実はこの二つの箇所は対称関係…コントラストで描かれているのです。年間第二主日にあって早くも四旬節を先取りしてしまいますが、それはそれでいいでしょう。

ヨハネ福音書に於いて十字架に付けられたイエス様…「渴く」という言葉を発したイエス様は酸いぶどう酒を口に含ませ、それを最後に「成し遂げられた」という言葉によって息を引き取られました(19・28-30)。この場面を思い浮かべるとカナの婚礼の場面との繋がりが見えてきます。まず、婚礼の場面でイエス様は水を上等なぶどう酒に変えた、というしるし・奇跡を行われました。そして、それを客が飲みました。しかし、イエス様が最後に口に含んだのは酸いぶどう酒…言わば、出来損ないの酔のようなものを人によって飲まされたのです。つまり、始まりと終わりでは内容が正反対なのです。水を上等なぶどう酒に変えたように酸いぶどう酒を末期の酒に相応しい味に変えてもよさそうなものですが、イエス様はそれをなさらなかったのです。実に、カナとは異なり、「ご自分の栄光を」(2・11) ゴルゴダでは現されなかったのです。また、カナでの六個の水瓶が象徴する不完全なイエス様のあり方は、ゴルゴダでの十字架の死によって完全なものとなりました。それはイエス様の「成し遂げられた」という言葉からわかります。つまり、この時こそが「イエス様の時」が来た時だったのです。イエス様はこの言葉に見られるとおりに、この地上ですべきしるしを完全に果たした…即ち、「成し遂げられた」がゆえに三日目に復活という栄光を“神様から”お受けになったのです。さて、ここで注意が必要なのは「復活」という言葉です。日本語で「復活」という言葉を使いますが、原語には「復活」という言葉はありません。「起こされた」という受動態での表現が使われています。喩えていうのなら、寝ている子どもをお母さんが手を取って起こすように、神様がイエス様を起こされたのです。ですから、復活の主体は神様であることを忘れてはいけません。このことをしっかりと理解しておかなければ、イエス様の復活と死者の蘇りを混同してしまいます。イエス様の復活とはホラー映画にあるように土葬された死体がお墓の中から起き上がってくることはまったく異なります。信仰宣言の中で「三日目に死者のうちから復活し」と唱えますが、イエス様は自らの力で死者の中から復活したのではなく、「三日目」という言葉が表しているように、神様の御業によって死者のうちから、神様によって起こされたのです。カナではしるし・奇跡を起こしたのはイエス様でしたが、ゴルゴダでは神様が大きい御業をなされたのです。ここにもカナとゴルゴダが対称的に描

かれています。さらには、婚礼は喜びですが、死は悲しみです。こうした一連の対称を通じて福音記者ヨハネは何を表現したかったのでしょうか。

カナの婚礼で弟子たちはイエス様がなさった水をぶどう酒に変えるというしるし・奇跡を見て信じました。ヨハネ福音書の結びは「あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、信じてイエスの名により命を受けるため」という言葉です(20・31)。私たちにはイエス様を信じるようになった、という始まりがあります。それは喜びです。しかし、たとえイエス様を信じていても私たちが死を迎えるとき、それは悲しみであることは否めません。しかし、その悲しみは復活の命、即ち、イエス様の名により新たな命を受けるための通過点、まさに「過越し」なのです。実にこれが「イエス様の時」が来た時を意味すると同時に来るべき“わたしたちの時”をも意味するのです。イエス様を信じるのなら、死の悲しみは新しい命に生きる喜びに変わるはずです。このことはこの世のあらゆる出来事を遥かに凌駕する希望と喜びです。実はこのことがカナの婚礼とゴルゴダでの磔刑との対称を通じて描かれているのです。つまり、誕生という人生の始まりがあり、死という人生の終わりによってすべてが終焉を迎えるように思えてしまいます。しかし、イエス様を信じる私たちにとっては、そこから復活という新しい命であり真の命が始まる、ということを福音記者ヨハネは私たちに訴えたかったのです。

復活したイエス様はトマスに「わたしを見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いである」(20・29)と語られました。この言葉はトマスだけにではなく、今を生きる私たちにも向けられています。私たちは弟子たちのように生前のイエス様を知ることはできません。ましてや直接にイエス様のしるし・奇跡を見ることはできません。しかし、私たちは聖書を通じて、日々の祈りを通じて、そして黙想を通じて、弟子たちと同じようにイエス様を信じることができます。日々の信仰生活を送るにあたってカナの婚礼に参加しているかのような喜びを感じることもあるでしょう。しかし、時としてイエス様と共にいる喜びは悲しみや苦しみ、または無味乾燥なものに変わってしまうことも少なくありません。そうした現実を生きる中で、日常を遥かに超えたところに信仰を生きる喜び、イエス様と共に永遠の命に与ることができる、という希望があるのです。そして、その希望はイエス様の復活によって確かなものとされたのです。これこそがイエス様の栄光なのです。この信仰年にあたって毎週読まれる聖書箇所、特に福音箇所をミサの中で味わい、聖霊の助けによって私たちの信仰が深まっていくように祈りましょう。